

医師と高校生物

医学部進学生が高校卒業までに培っていなければならないと考えられる能力について、これまでに現れたいくつかのご趣旨のなかに、わたしが懸念するものがありますので、いまいちどわたしの考えを述べます。

わたしは、今日の場合の中で「医学部進学者が生物を受験すべきことは論を待たないほど明白な要請である」とする点を危惧します。もしも生物で受験しなければ医師として一人前になれないかどうかを、高校で経済学を学ばなければ経済学の権威たりえないかと、対比して想像してみます。この比喩が適切でないとするれば、それはわたしが経済学徒でないので経済学の内実を知らないからです。経済学についてわたしは想像しているだけですが、もしかしたら、わたしが危惧するご意見は医師について想像されただけで医師の内実をご存じないことからきているのではないかと推測します。

古い話になりますが、わたしの頃の公立校は生物は履修が地学との選択だったようなかすかな記憶がありますが、当時の医学部同級生80名中、理科受験2科目のうちで物理と生物の受験者は2名、そのひとりわたし、で他はすべて物理と化学でした。今日の高校教科のレベルは当時とは比較できないほど高くなりました。しかし、生物が理解する課題で解く課題ではないことは今も昔も変わらないと思います。

医師（臨床家）が欠いてはならないのは「見つけて解く」能力です。対象（患者）は白紙です。問題さえ書かれていません。観察して設問することから始まるのです。むろん秩序だった知識は要ります。羅列的な知識は役立ちません。だが、たとえ知識を保有していても、「見つけて解く」能力が希薄であれば解説者・評論者や、あるいは技能者たり得ても臨床家たり得ません。この「見つけて解く」過程はもっぱら頭の中ですから、外からは見えません。傍から見てみると、保有している知識を書物をひもどくごとくに持ち出しているだけのように見えるかもしれませんが、そうではないのです（ご参考までに、医師向けのHPの <http://www.ggf.ilc.or.jp/user0/murayama/home.html> は、この間の気持ちを多少は伝えているかもしれません）。

「見つけて解く」能力の「土台」を培って医学部に進学してもらいたいのです。他をさしおいて生物こそが、その能力を培うための格好の材料ならば生物受験を必修とすべきです。しかし、生物のほかにより有用な教材があるなら、まずはそれを使用すべきです。高校生に与えられた有限の時間を考えると、歴史の概念も学び、スポーツ等で情緒も鍛え、などなど、あれもこれもできようはないと思うのです。もちろん、その上であれば生物も受験して進学すべきです。だが、「見つけて解く」能力の土台が希薄なままでは、たんに物知りになるだけです。物知りの馬鹿もいるとはいえ物知りのほうがよいですが、高校生物の理解と知識量は、そのあと6年間医学部で学び、さらに卒業後に研鑽すべき臨床家の到達地点から

見ると、蓄積されたと言うほどのものではありません。それがなければ先へ進めないほどの大きさではないと思います。

わたしは公立の高校生に（生物系志向のものにも）、生物ではなく物理・化学で受験するよう勧めてきました（生物は高校1年生で履修）。大学では専門学部へ進む直前になって生物の講義が始まって、当初は生物を受験してきたものより知識が劣っていることにとまどったが、日本語と英語の教科書を勉強して追いつくことができたと言いました。生物はそれが可能だと思うのです。解く課題である数学や物理では、追いつくことはいっそう困難で、限られた時間の中では挽回不能に見えます。

わたしは、受験科目を減らし入学試験を易しくするという、受験生への妥協にはまったく賛成できません。高校で理科の基礎科目をすべて（くわえて強く主張しますが、社会・人文科学も受験不要科目も）必修とすることに賛成です。問題の一つは、これら基礎科目の到達目標レベルです。大学理系の履修科目が多くて教員資格がとりにくいのと同様に、高校生が履修しきれないようなレベルであってはならないと考えます。賢明な目標設定が望まれ、それには限られた身分や経験の人たちだけに委ねていてはならないと感じます。つぎの問題は、受験科目のレベルを下げないために基礎科目のうち受験不要科目を減らしてしまわないことです。進学私学校のなかには、そういった高校もあると聞きますが、人間の安定した情緒発達にかかわるスポーツや書画楽の効用を考えると、これらを本気で生徒にさせる必要を感じます。医学部にはことのほか重要です。

最後に、「見つけて解く」知的能力に適切な科目と達成目標・評価の具体的な方策です。わたしは18歳の人間に自分の適性が分かるはずもないと思っています。好き嫌いといったところで、たかだかその時の、うわべに過ぎないレベルで、選択受験を迫られているのが実状で、好き嫌いもたまたま授業がたのしかったとか、気に入ったといった類に由来しているでしょう。好き嫌いだけで人生が処理されるはずもありません。そのとき嫌いでも全力で当たらねばならないレベルというものがあります。今日までわれわれ人間の営為であった主題はなんであれ、じつは面白くないわけがない。なにごとであれ全身で取り掛かることができる情緒と知的能力を培うことが高校教育の、とりわけ上級科目の、秘めたる目標と思います。したがってそれを損なわないならば何であれ許容し、損なうならば受け入れない。と申しましたが、わたしはこれらを培うのは高校ではとき既に遅く、現実の高校はその能力を得てきたものを選び分ける場所として機能すると思います。以上の中で、生物の占める位置はどこかを考えた末、生物が医学部受験の必須科目でなければならぬかが結論されるべきと思います。そして、その時上級科目としての生物のレベルも定まります。具体的には、医学部受験に生物受験を必修とすれば、他には何を必修とし何を省くかも考えなければなりません。一つを選ぶとは他を捨てることです。

今日の公立高校と大学受験の様態を前提にしたうえで、わたしは古くは同級生たちの個人史と今日の卒業生から聞いているありさまと、私的な経験とから、生物受験は医学部に必修ではないと考えます。上級科目としての生物は大学から始まって十分だし、高校の3年の時間をそのためよりも情緒と知的能力の向上（正しい選別に）に振り向けたい。もし基礎科目以上の生物知識を与えるなら、医学・生物系志望ではない者に履修させたほうがよいとも思えます。高校卒後にチャンスは無いからです。

と言っても、高校にたいする誤認もあるかもしれないので、わたしが現実の高校教員のかたにおたずねしたいのは、各教科が「見つけて解く」能力の教育（選別）にどのように寄与できるかと、3年の時間の中でどこまで現実に可能かと、さらにその能力の評価査定（選別）は具体的に何か、ということです。わたしは卒業してきた若い医師を知っていますが、高校は送りだした生徒が現実の医師としてどうなったかを知ってはいないだろうと思います。一方わたしのほうは、かれらが高校時代にどうであったかをはっきり知ってはいません。ただ、たんに履修の有無だけでなく得意や不得手だった教科やどう勉強してきたかを聞き取って想像しているばかりです。わたしが知る医学部卒業生はまだ理科2科目選択制以前の者ですが、それでも「見つけて解く」能力を憂います。

またわたしは、R.M氏が懸念されている大学入学後の生物試験12点の違い（生物履修の有無で生物受験の有無ではない）が、その後に臨床家としてどう違ってきたのかを知りたいとも思います。それまで待っていては遅いかも知れないから、その試験問題と学生の平均的な実際答案を知らされれば、わたしの危惧が的外れと分かるかも知れません。

（高等教育フォーラム 1998. 7.16）